

福田恵一 — 福山生まれの歴史画家 —

2018年 **9月27**日(木) — **12月9**日(日)

会場：常設展示室

※月曜休館 ただし 10月8日(月祝)、11月12日(月)、11月19日(月)、11月26日(月)、12月3日(月)は開館 10月9日(火)は休館
 ※学芸員によるギャラリートーク 10月5日(金)、11月16日(金)、12月8日(土)午後2時より



挿図1 No.24《千利休》(《露地の秋》から改題)

はじめに

福田恵一は、1895(明治28)年、福山市神島町上市に生まれた⁽¹⁾。旧制の福山中学校(現・福山誠之館高校)を経て1917(大正6)年、東京美術学校(現・東京藝術大学)図画師範科を卒業後、大阪に移り住んで、中学校や陸軍幼年学校、女学校などで教職に従事しながら絵画制作をおこなっていた。1923(大正12)年、日本美術展に作品2点が入選し、これを契機に京都の西山翠嶂(1879-1958)に師事、彼が主宰する画塾青甲社^{しやうこうしゃ}に入社する⁽²⁾。同門には、堂本印象(1891-1975、No.52)や上村松篁(1902-2001、No.53)らがいた。翌年からは、青甲社展や帝国美術院展覧会(帝展)・文部省美術展覧会(新文展)を中心に作品を発表し始め、帝展では3回の特選を受賞、無鑑査の待遇を得、後には審査員もつとめている。青甲社塾員のなかでは、出世頭である「天才型」の堂本印象に次ぎ、「一番努力型の」実力者として捉えられていた⁽³⁾。京都を制作本拠地として活動したが、戦時中は福山へ疎開のために帰郷してもいる。

恵一が得意としたのは、歴史上の出来事や人物を主題に描く歴史画(特に歴史人物画)だった。本展では、近年寄贈された作品も含めて、恵一の歴史人物画を中心に取り上げる。同時に、書簡や着物などの美術資料を交えて、大正・昭和初期に活躍した福山生まれの歴史画家の画業をひもといていきたい。

1. 近代日本における歴史画の流れ

まず、「歴史画」という言葉についてだが、これは西洋から輸入・翻訳された用語である。西洋における「歴史画(historical painting)」は、歴史上の出来事ばかりでなく、伝説や神話、宗教や戦争などを描いた絵画も含め、広義で捉えられる絵画の総称をいう。17世紀以降のアカ

デミーにおいて、歴史画は肖像画や風景画、風俗画や静物画といった他の絵画分野よりも高い地位を与えられてきた。一方、日本でも、古来、故人物画や絵巻など、歴史を主題とした絵画はあったが、明治期以降、西洋化の波を受け、江戸時代以来の史話を主題にした絵画をもとに、近代的な「歴史画」が誕生する⁽⁴⁾。それらは「絵画的ではない道徳や教訓」を主張する絵画で、かつ必ず、「通俗的であるほどに人々に了解されるもの」⁽⁵⁾が望まれていた。

近代日本の歴史画の特徴として、塩谷純氏は、1) (西洋絵画的な骨格を意識させる) 人物描写の改造、2) (有職故実の研究による) 時代考証、3) イデオロギーとの結合という3点を挙げている⁽⁶⁾。特に、3) のイデオロギーとの結合は特に重要な特徴だった。なぜならそれは、山梨俊夫氏も述べるように、「歴史主題を扱った絵画は、近代国家の意識や歴史認識のありようを反映する」⁽⁷⁾からであった。

確かに、近代の歴史画をめぐる出来事は、イデオロギーとのかかわりが強い。例えば、1868(明治元)年の菊地容齋による『前賢故実』公刊が挙げられる。本書は、日本の神話、伝説、歴史上の賢君・忠臣・烈婦571人を時代毎に略伝とともに掲載した図像集で、刊行以来、多くの歴史画家に影響を与えた。本書を貫く尊王思想は、天皇制国家の形成の一助となった。また、1889(明治22)年、岡倉天心は、美術雑誌『国華』創刊の辞において、「歴史画八国体思想ノ発達ニ随テ益新興スベキモノナリ」と述べ、「歴史画」がイデオロギーと密接な関係にあることを明白にしている。その他、明治30年代前半には坪内逍遙と高山樗牛らによる歴史画をめぐる論争が、また1899(明治32)年には、読売新聞による東洋歴史画題の懸賞募集などがあり、通常、明治20年代から明治30年代半ばまでが歴史画の草創期とみなされる。その後、1907(明治40)年に始まる文部省美術展覧会(文展)という政府主催による展覧会(官展)の創始後も、大正から昭和初期にかけて、二つの世界大戦を経験する中で歴史画は描き継がれてゆく⁽⁸⁾。歴史画は戦時下の国威発揚のための絵画としての役割を担っていた。

近代の歴史画家のうちでも、福田恵一は、歴史人物画家と称された⁽⁹⁾。具体的な歴史的逸話を取り上げるというよりも、人物を主体にした表現が多いからであろう。画家は想像力を膨らませて歴史人物を自由に動かし、そこに真意を託したのである。以下に、恵一の画業についてみてゆく。

2. 福田恵一の画業

(1) 1920年代—3回の帝展特選受賞

恵一は、はじめから歴史画を中心に描いていたのではない。現在、画壇デビュー作と考えられている⁽¹⁰⁾、1920(大正9)年の第6回大阪美術展に出品された作品は、《兄妹》という人物画であった。1924(大正13)年の第5回帝展初入選作は《うすれ行く斜陽に暮る》という農夫とその家族を描いたものだったし、また、1926(大正15)年、第7回帝展に無鑑査出品した《安養》(No.15、挿図2)は、農村と家族の姿を描いて、安養国、すなわち極楽浄土を表現したものだ。本作は、キリスト教の三連祭壇画や仏画の三尊形式からの発想と思われる三連画形式を採用したもの。花々に囲まれた農村の家族の様子を描きながらも画面には荘厳な雰囲気感が漂う。生後間もなくして亡くなった子供の鎮魂という筆者の制作意図が反映されているとされる⁽¹¹⁾。これら初期の恵一作品からは、抒情性や浪漫性が看取される。大振りな肉厚な人物のモデリングの仕方、淡い色で輪郭をかたどったのちに彩色を施し、その上に細筆を重ねて輪郭をかたどってゆくといった表現技法も共通の特徴と言ってよい。

1925(大正14)年、第6回帝展で歴史人物画を発表して帝展特選を果たす。出品作は、狩野永徳の《唐獅子図屏風》を背にし、赤い頭巾と陣羽織を身にまとった豊臣秀吉(1536-1598)を中心に描いた3幅対の《豊公》(大阪城天守閣蔵)である。後述するように、恵一は秀吉を幾度も描く。その中には笑顔で我が子秀頼を抱くものもあるが、本作では為政者としての威厳あるたたずまいが表わされている。それ



挿図2 No.15 《安養》



挿図3 No.17 《花》(色紙三題より)

とよく似た姿の秀吉が描かれるのが、同年描いた《太閤秀吉》(No.14、挿図4)である。こちらは、杖をつきながらも鋭い眼光が印象的な立像である。服装は《豊公》と殆ど変わらない。1927年頃には、色紙三題《花》《山》《雨》(No.17～19、挿図3)が描かれた。これらは、絵巻の世界を再現したような作品で、淡い色調に加え、擦筆による人物モデリングが特徴である。

1928(昭和3)年の第9回、1929(昭和4)年の第10回帝展で、恵一は、それぞれ《文覚》、《重盛》を出品し、特選を連続受賞する。2度目の特選受賞後は、教職を退いて京都へ引っ越しもした⁽¹²⁾。画業に対する自信とともに将来への意気込みの大ききのあらわれでもあった。青甲社展出品作も歴史人物画を主題にした作品が増えてゆく。

近年当館に収蔵された資料には、北野恒富(1880-1947)、菅橋彦(1878-1963)、矢野橋村(1890-1965)、赤松雲嶺(1892-1958)ら大阪の画家と恵一が分担制作した1セット12枚の《大阪府献上歴史絵画はかき》(No.46)がある。神武天皇・皇后に始まり、仁徳天皇、聖徳太子、豊臣秀吉といった当時人気の歴史人物にかかわる逸話や、堺や大阪の町屋の様子が絵画化されたものだ。昭和天皇大阪行幸の記念消印が押されていることから、発行年は1929(昭和4)年6月頃と推測される。恵一は3枚を担当しているが、そのうちの《現代の大阪》(挿図5)と題された大阪の街を描く1枚は、「煙の都」⁽¹³⁾と呼ばれた大阪を淡く繊細な筆致で描いている。

(2) 1930年代—広がる舞台

1930(昭和5)年以降、恵一は、青甲社塾生7名による令煌社の創設、および展覧会開催をはじめ、聖徳太子奉賛美術展やベルリン日本美術展など、活動の舞台を広げていく。1934(昭和9)年の第15回帝展では審査員もつとめ、さらにこの年、アメリカへ遊学する。1938(昭和13)年には、仏画・仏像研究のために中国へ旅行し、夏には広島ではじめて個展を開催した。その後、翌年には、日本橋高島屋において福田恵一作画展覧会(第1回個展)を開催し、以後3年にわたって個展をひらく。

(3) 1940年代

1940(昭和15)年は、皇紀2600年の記念の年として、紀元二千六百年奉祝展が開催された年である。恵一は、《雄図》(愛知県美術館蔵)を出品した。本作は、世界地図が描かれた屏風を眺める織田信長の姿を横から描くもので、オルガン音楽を弾く黒人や、黒豹、絨毯、南蛮椅子など、異国を象徴するものや人が傍に描かれており、当時、昂揚していたナショナリズムを信長の大陸制覇の夢と重ね合わせているとされる⁽¹⁴⁾。太平洋戦争開戦後の1942(昭和17)年から1944(昭和19)年にかけては、軍用機献納作品展(《明日香野》)や産業戦士贈画展(《長政》)に出品したり、従軍画家として大陸戦線に加わったりしている。1943(昭和18)年の第6回新文展には、陸軍参謀総長・杉山元を描いた《御盾》を発表し、他の画家と同様、戦時体制に呼応した作品を制作する。戦争の激化に伴い、1944(昭和19)年には、広島県深安郡神辺町へ疎開する。福山の警察署長として赴任した島田薫荘氏と出会ったのもこの疎開が機縁であったようだ。《蒼鷹図》(No.23、挿図6)、《貼り交ぜ屏風》(No.37)は島田家のために制作された屏風である。

当館所蔵の恵一の作品は圧倒的に1940年代制作と考えられる作品が多い。戦前から人気の高かった江戸時代初期の剣豪《宮本武蔵》(No.26、挿図7)や《武将》(No.27)、《奮進図》(No.36)などの武人に加え、《桃太郎》(No.42)といった少し変わった作品もある。桃太郎は、戦前人気の高かった伝説上の人物である。その物語は1887(明治20)年以降、小学校国語読本の教科書に取り上げられ、国民的英雄として捉えられていた⁽¹⁵⁾。興味深いのは、桃太郎が通常我々がイメージするような鎧姿ではなく、小太りで直垂姿であることで、ユーモラスですらある。

(4) 戦後の恵一

1945(昭和20)年8月、福山で終戦を迎えた恵一は、すぐに帰洛したらしい⁽¹⁶⁾。そのことは、8月17日付の島田薫荘氏への京都からの書簡(《島田署長様宛書簡(帰洛の挨拶)》、No.47)からも伺える。敗戦を「神州男子切齒の極み」と漏らす。また、同じ宛先の同年11月7日付の書簡(《島田署長様宛書簡(永楽堂消印)》、No.48)では、社会の混乱とそれによる人心の荒廃について触れたのち、「けは



挿図4 No.14《太閤秀吉》



挿図5 No.46《現代の大阪》(《大阪府献上歴史絵画はかき》より)



挿図6-1 No.23《蒼鷹図》右隻

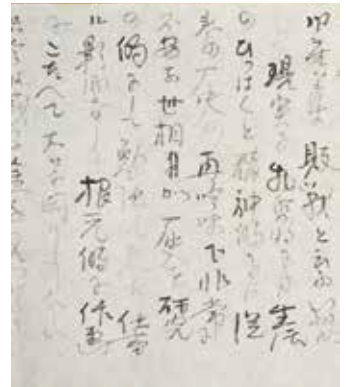


挿図6-2 No.23《蒼鷹図》左隻



挿図7 No.27《宮本武蔵》

しい世想の中にこれから来春の官展への準備にかゝります。いつれを見ても創作慾を削ぐ事のみの中に一しほの苦痛を覚へます。しかし兎に角がんばります」と、翌春 1946(昭和 21)年に控えていた「官展」、すなわち第 1 回日本美術展覧会(日展)の準備にかかる旨を伝えている。だが、同展覧会に恵一が出品した記録はみあたらない⁽¹⁷⁾。おそらく戦後初の出品作は、同年秋の第 2 回日展出品作《露地の秋》(のちに《千利休》(No.24)と改題、挿図 1)である。投函年不明(10月3日付)の書簡には、「敗戦と云ふいかめしい現実に物質的には生活のひっはくと精神的には従来の歴史の再吟味で非常に不安な世相が歴史を研究的にして勉強して来た仕事に影響して根元的に作画にこたへて大いに困りました」(《島田薫荘様宛書簡》、No.49、挿図 8)とある。戦後、それまで多くの日本人の間で共有されていた「従来の歴史」観が覆されたことは、恵一の画業にとっても大きな動揺をもたらした。



挿図 8 No.49《島田薫荘様宛書簡》部分

1952(昭和 27)年、恵一は第 8 回日展に《ガラス》を依頼出品する。この作品は、背中を見せる裸婦を描いたもので、恵一の作品には珍らしい画題であった。雅号を「丁土^{あつと}」と変えたのも、歴史画を描いてきた恵一が、目まぐるしく移り変わる戦後の日本画界を前に、新しい挑戦として描いたことのアラわれと言える。しかし、この作品は恵一の日展への最後の出品作となった。1956(昭和 31)年 6 月 20 日、恵一は京都の病院にて死去し、滋賀県大津市の西教寺に葬られたのである。61 歳だった。

3. 福田恵一の描いた歴史人物たち

以下では、歴史人物ごとにいくつかの作品について解説を行う。

(1) 豊臣秀吉

桃山時代の歴史人物は、近代以降、人気の高い主題であり、多くの作家が取り上げた。特に、天下人・豊臣秀吉は、文展に始まるいわゆる「官展」や、下村観山などの日本美術院の作家らによってしばしば絵画化されてきた。恵一もまた、その例に漏れず、織田信長や淀殿、千利休、加藤清正などとともに、豊臣秀吉を多く描いており、1925 年の《豊公》をはじめ、《豊太閤》(平成芸術花院蔵)、《名護屋陣之豊公》(ロシア国立東洋美術館蔵)、《おひろひ》(1938 年、第 2 回新文展出品)といった作品がある。恵一自身、「太閤さんが使節原田孫七郎をマニラに遣したことは有名である。太閤さんの亡くなられたことに依つて、南進は一時中断せねばならなかつた。これが日本発展の欧州各国に遅れた原因であつた。わたくしは、太閤さんの像を画く毎に思ふのである。もう五年か十年いきてみて下さつたら、と。…(中略)今日にしていよいよ太閤さんの偉かつたことを思ふのである。」とも述べている⁽¹⁸⁾。

ここで、歴史人物の顔貌表現についてだが、これには二種類あると言ってよい。一つは、既存の絵画や写真などのイメージをもとに描いたもの。表情は典型的で堅いものとなるが、像主がわかりやすい。もう一つは、既存のイメージにこだわらず、画家が自由に表現したもので、人物に対する親しみや理想の姿など、画家のもつ人物イメージが投影される。恵一が描く秀吉像についても、《豊臣秀吉像》(宇和島伊達文化保存会蔵ほか)などの図像を借りながら描かれた《豊公》などの作品と、《おひろひ》など全て画家が自由に表現した作品の二種類がある。

当館には、2 点の秀吉を描いた作品が所蔵される。そのどちらも既存の秀吉イメージをもとに描いたものだ。1 点目は前述した《太閤秀吉像》(No.14)で、老齡の秀吉が赤い頭巾・陣羽織を身に纏い、杖を片手に佇む姿を描いたもの、2 点目の《豊太閤淀殿茶々姫双幅》(No.20、挿図 9)は、日本においては皇帝や神の象徴⁽¹⁹⁾であった唐冠(烏紗帽)を被る束帯姿の秀吉と、扇子を片手に艶やかな表情をした淀殿(茶々)を描



挿図 9 No.20《豊太閤淀殿茶々姫双幅》

いたもの。後者の作品には、江戸時代以前に形成された、《豊国大明神》として神格化され、超越した存在としての秀吉イメージが踏襲されている。一方、淀殿は、扇子を持つ右手で口を覆いながらも白い歯を見せる。淀殿も大正・昭和初期の日本画家の間でしばしば描かれた。その多くは、恵一の《淀殿》(大阪城天守閣蔵)のように、豊臣家を背負う女性としての毅然とした美しさを表現したもののだが、ここに描かれているのは享樂的とも思われる笑みを見せる姿である。文展作家の三木翠山(1887-1957)は、「淀君」ほど、「人気の悪いもの」はおらず、「悲運の女も少」なく、また、「美人も少」ないと述べている⁽²⁰⁾。江戸時代に『絵本太閤記』などの諸本によって成立した⁽²¹⁾、淀殿=悪女といったイメージがここにもあらわれているのかもしれない。

(2) 千利休

侘び茶の大成者・千利休(1522-1591)を描いた作品も多い。当館には、千利休を主題にした作品が2点ある。1946(昭和21)年、第2回日展に《露地の秋》として出品された二曲一双屏風《千利休》(No.24、挿図1)は、利休とその娘子を描いたもの。左隻に黒衣姿の利休が杖を突きながら歩く。その姿は秀吉に自刃を命じられる原因となった、大徳寺山門に掲げられた木彫の利休像にイメージの源泉があるだろう。右隻のいわゆる⁽²²⁾辻が花染の着物を身に着ける娘は目を伏せ、父親である利休の後に続く。手にするのは、豊臣家の家紋である桐紋の入った反物である。永井明生氏は、本作品の主題を、秀吉から娘を側室に迎え入れたいとの願いに対して、利休は娘が未亡人かか子子供もいることを理由にその申し出を断ったという、利休処刑の遠因になったとも言われる一件を取り上げたものであるとし、娘の持つ反物を「秀吉から贈られたものであろうか」と推測する⁽²³⁾。ちなみに、当館には、恵一が同様の柄を描いた着物(no.45)が美術資料として寄贈されているが、桐紋が入っており、豊臣家の人びとを多く描いてきた恵一ならではの機知に富んだ作例である。

もう1点の《千利休》(no.25、挿図10)は、利休が茶道具を拝見する様を描いたもの。器物は、中国殷(商)代に使われた酒杯の一種・觚を模して造られた青銅器(古銅)である。太肉の姿は、本作のバリエーションである広島県立美術館蔵《千利休》とも共通する。登場人物を左向き横から描く方法も、《雄図》をはじめとして、恵一の作品に頻出するものだ。

(3) 織田信長

織田信長(1534-1582)を主題とした作例も多い。《雄図》は世界制覇を目論む信長を描いていたし、《信長上洛》(愛知県美術館蔵)では、緋のマントを翻しながら黒い馬に乗る信長が雨の中を臣下たちと突き進む姿があらわされた。どちらも壮年の威厳ある姿だった。一方、当館が所蔵するのは、《若き日の信長》(No.35、挿図11)。太田牛一『信長公記』首巻に「明衣の袖ははずし、半袴、ひうち袋、色々余多つけさせられ、御髪はちゃせんに、くれなゐ糸、もゑぎ糸にて巻立てゆわせられ、太刀朱ざやをささせられ、悉く朱武者に仰せつけられ…」とあるように、本作品でも、右手に槍を持ちながら白馬に乗る青年の信長は、片肌を脱いで、腰に沢山の提物を巻き付け、髪は茶筌にして、朱鞘の太刀をたばさむ。切れ長の目で理想化された顔貌表現である。

(4) 菅原道真

菅原道真(845-903)は、遣唐使廃止を建議し、醍醐天皇治世では右大臣に至るほどであったほどの公卿であるが、藤原氏の^{ざんげん}讒言により、大宰府に左遷された。菅公も古来、様々なかたちで絵画化されてきた。例えば《北野天神縁起絵巻》では、ユーモラスな姿が描かれ、《天神像》では学問の神として尊崇の対象として扱われている。明治になると、小堀鞆音(1864-1931)が菊池容斎の『前賢故実』をもとに、第一高等学校(現・東京大学教養学部)のために、椅子に腰掛け、左足を右足に掛ける束帯姿の偉人として、^{いし}《菅公図》を描く。一方、当館所蔵の恵一描く2点の道真公のうち、《菅原道真公図》(No.38、挿図12)は、束帯姿で^{ほいどう}佩刀し、椅子に腰掛ける点では同じで、このポーズは



挿図 10 No.25 《千利休》



挿図 11 No.35 《若き日の信長》



挿図 12 No.38 《菅原道真公図》

『前賢故実』や鞆音の作品に由来するが、笏の代わりに紙と硯を持つ。右大臣としての威厳というよりも、詩歌を嗜む教養高い壮年の貴族として描かれているのである。同構図の作品が個展の展覧会図録に見ることから、バリエーションの一つとして制作されたものと思われる。袍の黒色は、恵一に特徴的な表現法で、同じ黒でも濃淡を変えることにより、質感を表現する。もう一つの《菅公》(No.39、挿図 13)は、紅白の梅の枝の下、烏帽子を被る直衣姿の青年の道真を描いたもので、箱書きに恵一自筆で《菅公》と書かれている。道真は若く美しく描かれ、寛いだ表情を見せる。これら2つの作品は、菅公の人間らしさを強調した作品と言える。



挿図 13 No.39 《菅公》

おわりに

穏やかな色調、繊細で優美な線描が特徴の恵一の歴史人物画からは、気迫や気品とともに通俗性も感じることができるとも言える。それは、時代が歴史人物に付与したイメージを恵一がうまく用いたためとも言える。画家は想像を膨らませて、彼らを画面上で自在に動かした。それは、歴史画家の醍醐味だろう。

戦後、それまでのイデオロギーに対する反省や、モダニズムの波を受け、日本画壇は大きく変化していく。そのうねりの中で、歴史画は以前ほどには描かれなくなっていった。福田恵一の名も歴史の中に埋もれてきたと言わなくてはならないかもしれない。だが、戦前、恵一は高い評価を受けていた。そのことを見直してみてもいい。過去の日本社会について、より深く知るきっかけにもなるはずだ。

(学芸員 菊地かの子)

註

- (1) 尋常高等小学校の一級下には、池田暹邨(1895-1988、No.50)がいる。
- (2) 猪木卓爾・豊田豊「福田恵一」(『現代日本画壇の精鋭』、美術往来社、1935年)
- (3) 国民美術研究所編「福田恵一」(『西山画塾青甲社』、美術春秋社、1943年)
- (4) 山梨俊夫『描かれた歴史』(ブリュッケ、2005年)
本書は、展覧会カタログ『描かれた歴史 近代日本美術にみる伝説と神話』(兵庫県立近代美術館・神奈川県立近代美術館、1993年)に基づいて著された、近代日本の歴史画に関する基本文献である。
- (5) 前掲(4)
- (6) 塩谷純「菊池容斎と歴史画」(『国華』1183号、1994年)
- (7) 前掲(4)
- (8) 橋本慎司「近代の歴史画—その誕生と展開」(『近代歴史画と羽石光志』、栃木県立美術館、2002年)
- (9) 浅野利真「福田恵一氏の個展に」(『美之国』第15巻第11号、1939年)の冒頭に、「花鳥画全盛の当今、かうした歴史人物画家のもてはやされない事夥しい」とある。その他、個展の展覧会図録などにもその呼称が見受けられる。
- (10) 前掲(2)
- (11) 同書
- (12) 『日本画の異彩三人展—福田恵一・猪原大華・和高節二』(広島県立美術館、2002年、p.136)
本所蔵品展目録は、本展覧会カタログに負うところが非常に大きい。展覧会ご担当者だった永井明生氏からは恵一に関する文献についてご教示を得た。記して謝したい。
- (13) 《大阪府御献上歴史絵画はかき》同封の解説文
- (14) 『日本美術全集 18 戦争と美術』(小学館、2015年、《雄図》作品解説文より)
- (15) 『集え！英雄豪傑たち』(横須賀美術館、2018年)
- (16) 前掲(12)
- (17) 日展史編集委員会『日展史 16 日展編一』(1987年)
- (18) 『財政』(大蔵財務協会、7(6)、1942年)
- (19) 松島仁「豊臣、その失われた風景を求めて—「洛中洛外図屏風」と「豊国大明神像」をめぐる試論—」(『聚美』、vol.11、2014年)ほか
- (20) 前掲(18)
- (21) 福田千鶴『淀君—われ太閤の妻となりて』(ミネルヴァ日本評伝選、2006年)
- (22) 小山弓弦葉『辻が花』の誕生 <ことば>と<染色技法>をめぐる文化資源学(東京大学出版会、2012年)では、ここで描かれる桃山時代の「縫い締め紋」が、「辻が花(染)」とは呼べないことを明らかにしている。
- (23) 前掲(12)

その他の主要参考文献(註には挙げなかったもの)

- ・日展史編集委員会『日展史 6～15』(1982年—1985年)
- ・『ロシア国立東洋美術館所蔵 首藤コレクション 幻の日本画名品展』(横浜そごう美術館ほか、1999年)
- ・『2013年度 秋季所蔵品展 目録 福田恵一と森戸果香』(ふくやま美術館、2013年)

第1室：日本の近現代美術

No.	作家名	生没年	作品名	制作年	材質技法	縦×横×奥行 (cm)	寄託作品(*)
1	吉田卓	(1897-1929)	自画像	1919	油彩, カンヴァス	33.0 × 23.5	
2	吉田卓		静物	1924	油彩, カンヴァス	65.0 × 53.0	
3	吉田卓		卓上静物	1925	油彩, カンヴァス	91.0 × 73.0	
4	吉田卓		羽扇を持てる裸婦	1926	油彩, カンヴァス	90.0 × 130.4	
5	岡田謙三	(1902-1982)	海辺	1937	油彩, カンヴァス	145.5 × 112.1	
6	林武	(1896-1975)	妻の像	1927	油彩, カンヴァス	90.9 × 72.7	
7	熊谷守一	(1880-1977)	女の顔	1931	油彩, 板	41.0 × 32.0	
8	中山巍	(1893-1978)	少女	1951	油彩, カンヴァス	63.5 × 52.0	
9	小林徳三郎	(1884-1949)	花と少年	1931	油彩, カンヴァス	53.1 × 65.0	
10	南薫造	(1883-1950)	夏	1919	油彩, カンヴァス	116.0 × 91.0	
11	南薫造		震災の街	1923	油彩, カンヴァス	49.5 × 60.0	
12	須田国太郎	(1981-1961)	卓上静物	1940	油彩, カンヴァス	72.0 × 116.0	*
13	須田国太郎		秋の草花	1944	油彩, カンヴァス	59.1 × 39.6	*

第2室：福田恵一 — 福山生まれの歴史画家 —

No.	作家名	生没年	作品名	制作年	材質技法	縦×横×奥行 (cm)	寄託作品(*)
14	福田恵一	(1895-1956)	太閤秀吉	1925	絹本着色	126.0 × 56.0	
15	福田恵一		安養	1926	絹本着色	中 235.8 × 211.5 左・右 208.5 × 111.5	
16	福田恵一		花下佳人図	1927	絹本着色	51.5 × 54.0	*
17	福田恵一		花	1927 頃	絹本着色	27.1 × 24.0	
18	福田恵一		山	1927 頃	絹本着色	27.1 × 24.0	
19	福田恵一		雨	1927 頃	絹本着色	27.1 × 24.0	
20	福田恵一		豊太閤淀殿茶々姫双幅	1943 頃	絹本着色	49.6 × 57.5	
21	福田恵一		舞妓図	1943 頃	絹本着色	39.5 × 51.5	
22	福田恵一		式正大鎧 (源太産衣鎧像)	1944 頃	絹本着色	129.0 × 41.0	
23	福田恵一		蒼鷹図	1945 頃	紙本墨画	169.0 × 186.0	
24	福田恵一		千利休	1946	絹本着色	186.0 × 186.0	*
25	福田恵一		千利休	1940 代	紙本着色	51.7 × 50.0	
26	福田恵一		宮本武蔵	1940 代	絹本着色	39.5 × 43.5	
27	福田恵一		武将	1940 代	絹本着色	49.0 × 54.0	
28	福田恵一		柿本人麻呂	1940 代	紙本墨画着色	51.0 × 51.0	
29	福田恵一		平賀源内	1940 代	絹本着色	39.5 × 45.0	
30	福田恵一		坂本龍馬	1940 代	紙本着色	27.0 × 24.1	
31	福田恵一		達磨	1940 代	紙本着色	27.0 × 24.0	
32	福田恵一		日之出富士	1940 代	紙本着色	27.0 × 24.0	
33	福田恵一		桔梗	1940 代	紙本着色	27.0 × 24.0	
34	福田恵一		火縄銃	1940 代	絹本着色	34.5 × 33.5	
35	福田恵一		若き日の信長	1940 代	絹本着色	49.0 × 57.0	
36	福田恵一		奮進図	1940 代	絹本着色	63.0 × 71.5	
37	福田恵一		貼り交ぜ屏風	1940 代	紙本着色, 墨書	165.0 × 168.0	
38	福田恵一		菅原道真公図	1940 代	絹本着色	44.8 × 51.0	
39	福田恵一		菅公	1940 代	絹本着色	56.0 × 62.0	
40	福田恵一		源朝臣義家公像	1940 代	絹本着色	135.0 × 50.3	
41	福田恵一		佳き日の図	1940 代	絹本着色	45.5 × 51.5	
42	福田恵一		桃太郎	1940 代	絹本着色	38.0 × 52.5	
43	福田恵一		牛		絹本着色	32.0 × 45.0	
44	福田恵一		裸婦		紙本着色	42.5 × 54.5	
45	福田恵一		桐文様着物	1946 頃	絹	156.0 × 126.0	
46	福田恵一他		大阪府献上歴史絵はかき	1929	紙	9.2 × 14.1	

No.	作家名	生没年	作品名	制作年	材質技法	縦×横×奥行 (cm)	寄託作品(*)
47	福田恵一		島田薫荘様宛 書簡 (帰洛の挨拶)	1945	紙本墨書	24.4 × 30.4	
48	福田恵一		島田署長様宛 書簡 (永楽堂消印)	1945	紙本墨書	19.2 × 113.8	
49	福田恵一		島田薫荘様宛 書簡		紙本墨書	18.8 × 219.0	

同時代の日本画家たち

No.	作家名	生没年	作品名	制作年	材質技法	縦×横×奥行 (cm)	寄託作品(*)
50	池田遥邨	(1895-1988)	みなとの曇り日	1914	水彩, 紙	65.0 × 89.0	
51	金島桂華	(1892-1972)	魚心暖冬	1936	絹本着色	147.7 × 250.5	
52	堂本印象	(1891-1975)	風薫るころ		紙本着色	43.5 × 49.7	
53	上村松篁	(1902-2001)	竹鶴		紙本着色	30.0 × 49.5	
54	森戸果香	(1898-1993)	訪れ	1950	紙本着色	187.5 × 145.0	
55	大村廣陽	(1891-1983)	初音	1920-1930	絹本着色	37.5 × 41.5	
56	樂慶入 (樂家 11 代)	(1817-1902)	赤樂茶碗 ノンコウ七種 鶴うつし	明治時代	陶	8.3 × 12.2 × 12.2	
57	樂弘入 (樂家 12 代)	(1857-1932)	赤樂平茶碗	明治 - 昭和時代	陶	6.0 × 13.0 × 13.3	
58	樂惺入 (樂家 13 代)	(1887-1944)	黒樂菊置上茶碗 銘 菊慈童	1928	陶	5.4 × 11.8 × 11.8	
59	樂吉左衛門 (樂家 15 代)	(1949-)	黒樂茶碗 銘 夜聴	2003	陶	9.3 × 13.0 × 13.0	
60	十代尼宗哲	(1862-1926)	惺齋寿棗	大正時代	木, 漆	6.6 × 6.0 × 6.0	
61	惺齋宗左 (表千家 12 代)	(1863-1937)	茶杓 銘 出世鯉	大正 - 昭和時代	竹材	18.3 × 1.1	

第 3 室：ヨーロッパ近現代美術

No.	作家名	生没年	作品名	制作年	材質技法	縦×横×奥行 (cm)	寄託作品(*)
62	ギュスターヴ・クールベ	(1819-1877)	波	1869	油彩, カンヴァス	34.5 × 51.8	
63	ジュゼッペ・パリッツィ	(1812-1888)	羊飼いと羊の群れの風景	1870 頃	油彩, カンヴァス	49.0 × 72.0	
64	フィリッポ・パリッツィ	(1818-1899)	ザンポーニャ奏者	1862	油彩, カンヴァス	70.0 × 60.0	
65	メダルド・ロッソ	(1858-1928)	門番の女性	1883	ワックス, 石膏	37.0 × 30.0 × 17.0	
66	マルク・シャガール	(1889-1985)	青い村	1981	油彩, カンヴァス	24.0 × 35.0	
67	マルク・シャガール		青い花瓶	1978	油彩, テンペラ, カンヴァス	60.0 × 73.0	
68	パブロ・ピカソ	(1881-1973)	りんごとグラス、タバコの包み	1924	油彩, カンヴァス	16.0 × 22.0	
69	パブロ・ピカソ		近衛騎兵 (17,18 世紀の近衛騎兵)	1968	油彩, パネル	81.0 × 60.0	*
70	ソーニャ・ドローネー	(1885-1979)	色彩のリズム	1953	油彩, カンヴァス	100.0 × 220.0	
71	ウンベルト・ボッチオーニ	(1882-1916)	カフェの男の習作	1914	油彩, カンヴァス	58.0 × 46.0	
72	ジャコモ・バッラ	(1871-1958)	輪を持つ女の子	1915	油彩, カンヴァス	51.0 × 60.5	
73	ジョルジョ・デ・キリコ	(1888-1978)	広場での二人の哲学者の遭遇	1972	油彩, カンヴァス	80.0 × 60.0	
74	モーリス・ユトリロ	(1883-1955)	酪農場	1916	油彩, 板	51.0 × 65.0	
75	アルペール・マルケ	(1875-1947)	停泊船、曇り空	1922	油彩, カンヴァス	38.4 × 46.0	
76	ジョルジュ・ルオー	(1871-1958)	ユビュ王	1939 頃	油彩, カンヴァス	45.5 × 68.5	
77	ベルナール・ビュッフェ	(1928-1999)	花束	1957	油彩, カンヴァス	65.0 × 55.0	

和室展示：松本コレクション

No.	作家名	生没年	作品名	制作年	材質技法	縦×横×奥行 (cm)	寄託作品(*)
78	作者不詳		丹波茶壺	桃山 - 江戸時代	陶	27.0 × 21.5 × 21.5	
79	辻与次郎		尻張釜	桃山 - 江戸時代	鉄	19.4 × 28.3 × 25.0	
80	二代坂本曲斎	(1909-1981)	北野天満宮絵馬所古材炉縁	昭和時代	木	6.6 × 42.4 × 42.4	
81	樂一入 (樂家 4 代)	(1640-1696)	樂鉛釉大脇指建水	江戸時代	陶	11.9 × 14.6 × 14.6	
82	樂惺入 (樂家 13 代)		黒樂茶碗 銘 あさか山	大正 - 昭和時代	陶	6.0 × 13.5 × 13.5	